

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
115

2025. 12

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



ママ、腕が伸びるかな？

9歳の少女サラ・ムサブ・バーシュは近所を標的にした空爆で、両腕と父親を一瞬で失った。
ガザの子どもたちは重すぎる現実を生きている。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言

戦後 80 年 平和の巡礼者として 祈り、行動しよう
「平和を作る人でなくても、壊す人にならないよう
互いに配慮した行動を心がけましょう」

オブレート会

スティーブ神父

オブレート会の神父で、インドから来ました。

中学校の歴史の授業で、第 2 次世界大戦について勉強しました。

初めて日本の長崎と広島の前爆のことを学んだ時、想像するのが
難しかったです。



2013 年 8 月に日本に来て、長崎で原爆が落とされた場所を目で見たとき、強い衝撃を
覚えました。

2014 年には、高松教区で「歌って踊って平和を語ろう」という平和の集いがあり、阿波踊
りを楽しみながら、平和のために祈り、ミサを捧げました。

2015 年 8 月には、北海道のホームステイのお母さんが、地域の平和を語る活動に連れて
行ってくれ、戦争はダメだというデモ活動にも参加しました。教会と社会の両方で、平和を広
げる活動が多いことを感じました。

今、戦争が起きている場所で、私たちにできることは少ないかもしれませんが。しかし、毎年
「平和旬間」と「平和月間」として、平和が広がるように願い、祈ること自体がとても大切だと
思います。なぜなら、私たちは「平和を作る人でなくても、壊す人にならないよう、互いに配慮
した行動を心がけることができる」からです。

私たちは一人ひとり、「平和の巡礼者」であることに気が付きませんか。世界を大きく変えるよ
うな平和を作る人でなくても、日々のささやかな生活の中で、争いを生まないように心がけ、
互いに配慮した行動を取りましょう。これが、誰でも実践できる平和への第一歩です。口にする
言葉や、伝え方、異なる意見を持つ人への態度も、平和の基盤を強くするか、傷つけるかを決
めることができるでしょう。

特別な場所へ行くのではなく、日々の生活を巡礼路として歩きながら、「争いを生まない」と
心で祈り、「他者を尊重する」という具体的な行動を取りましょう。

この地道な努力の積み重ねこそが、真の平和をもたらすと信じています。これからも平和旬
間・月間に参加し、平和のために祈り、行動しましょう。

私が利用する神戸電鉄で以下のような啓発ポスターを見つけました。



※悪くはないけれど、見守りだけでは合理的配慮になりません。

最近、SNSで繋がったカナダの司祭マーシュ師を紹介します。

マーシュ師は、ASD(自閉性スペクトラム症)を自認し、公表しています。

マーシュ師には、感覚障害があり、変な癖(上記図参照)がありました。

彼自身「私の子ども時代は、とても幸せな家庭環境で、両親は愛情深く、私のどんな癖も受け入れてくれました。もし今だったら、診断されていたであろう出来事が何度かありました」と、言っています。

マーシュ師は、他の人の適切な行動を観察し、分析を通して社会性を学びました。「他の人が無意識にやっていることを、私は意識的にやっていました。自閉症の人は意識的な脳の働きが遅いので、まだ完璧とは言えませんが、ほとんどの社会的な場面では問題なく対応できています。わからない時は、説明を求めることも学びました」と、話しています。

マーシュ師は、感覚過敏症(障害)のため、快適に感じる光の範囲が狭く、特定の音に敏感です。オフィスでは明るい照明を好みますが、外出時は日光を遮るためにサングラスをかけ、予期せぬ騒音による感覚過負荷を防ぐため、Hi-Fiイヤホンを持参しています。

マーシュ師は、ミサにおける不快な大きな音量と不快な眩しい照明をなくすことを訴えられています。

(つづく)

第2回「社会福音化部門のつどい in 高松」の報告

事務局 おおもり 大森 ゆうじ 雄二

今年最後の3連休の初日、11月22日の午後、四国カトリック会館(高松市)で行いました。参加者とスタッフを合わせて40名ほどで、当初の予想をはるかに上回る規模となりました。

「希望の巡礼者」を皆で歌ってから、持ち時間1分の自己紹介のお題は、「今、私のはまっていること」。熱弁・熱烈アピールが続いて、時計係は冷や冷やしましたが、伝えたい、知ってほしいという気持ちがあふれていて、素敵な時間となりました。

続いてビスカルドあつこさんから、シナピス=社会福音化部についての説明。特に、小教区の社会活動委員会の働き・役割について、①あらゆる情報を共同体に伝える。②賛否両論があるテーマについてもしっかり話し合う場を設ける。③委員が動くのではなく、共同体の皆が参加できるお手伝いをする。

シナピス新人職員の私にとっても勉強になる話でした。

休憩をはさみ、酒井司教の講話。「もっと社会に関わる教会となるには」をテーマに、①教会は社会の一部:教会の外へ、共同体の意識を地域社会へ開かない限り、社会からは認めてもらえない。②社会活動をする人たちが福音的になろう:社会の大きな問題を前に、大海の一滴として目の前の人に関わる自覚。その中では、自分の内面は常に伸びしろのある成長期。福音的な社会活動は自分磨きでもあり、八方美人的で良い。③教皇フランシスコの遺産:社会活動を通してすべてを解決できなくても、同伴することで、ともしびとなる。④教皇レオ14世が目指すもの:主の声を聴き、互いに聴き合い、この対話の中で、主が私たちがどこへと呼びかけているのか見極めること。⑤日韓司教交流会ミサでの李司教の説教:「船は停泊している時が最も安全だが、停泊するために作られたものではない。海を進むために存在する船は、停泊しては目的地に達しない。教会も日韓両国も同じこと。異なる歴史と文化、過去の痛みの傷の中にあっても、私たちはとどまっていたはダメで、一緒に航海を続けなければならない。私たちに必要なのは、安全な港に停泊している間に体験する「平和」ではなく、将来、海に向かって進んでいくための勇気を与えてくれる「平和」なのです」



存在する船は、停泊しては目的地に達しない。教会も日韓両国も同じこと。異なる歴史と文化、過去の痛みの傷の中にあっても、私たちはとどまっていたはダメで、一緒に航海を続けなければならない。私たちに必要なのは、安全な港に停泊している間に体験する「平和」ではなく、将来、海に向かって進んでいくための勇気を与えてくれる「平和」なのです」

私は特に②と⑤のお話が印象に残りました。背の高い司教さまの身振り手振りを交えての力のこもったお話は、参加者の心に届き、響いたことは、その後の「霊における会話」で感じる事が出来ました。

4グループに分かれたわちあいは、まとめの報告を聴いていて、その内容の豊かさを実感できました。祈り、身近な人との関わり、神との関わり、教会のあり方、社会や教会で疑問に思うこと、私たちが誰と共に歩むのか、などなど。参加者一人ひとりが、今の自分の姿や気持ち、教会や社会で感じることを、隠さずに安心してさらけ出すことで、今回のつどいが本当に良い集まりになったと思います。最後に酒井司教は「今日、ここに聖霊が働かれたことを感謝します」と締めくくられました。



《 社会福音化部門のつどい in 高松 》 参加者の声



- *お疲れ様でした。時間の配分は難しいですね。ただ、半日の方が参加しやすいかもしれません。学びもさることながら、こういう刺激も必要だと感じました。
- *始めは、いつもの空気とまた違った中で…としましたが。時間が進む中、聖霊が働くところは…同じ空気になるのだと実感しました。四国の方々との初めての交わりの機会をいただき、本当にありがとうございました。
- *今日は、大変お世話になり有難うございました。教会を通しての社会とのかかわり、つながりの大切さ、働きかけ、共に歩むことへ、自分なりの行動へと勇気をいただきました。私自身が社会の中の一人であることに感謝します。
- *酒井司教様の講話で、小教区の定義と認識を新たにしました。霊における会話の中で、祈りの大切さを感じました。発表を聞きつつ、グループ毎に様々な話がされたことに神様のお恵みがあったことを実感。最大のお恵みは、いろいろな方々にお会いできたことでした。
- *多くの気づきと有意義なわかちあいのひとときを過ごすことができました。このわかちあいを活かした活動が、個人としても共同体としても、そして多くの方々との交流をできるよう願います。
- *準備が大変だったと思いますが、ありがとうございました。良い場が持てたと思います。
- *「霊における会話」は何度目かですが、いつも恵まれ、感謝しています。祈りによって私たちが一体となり、本当に楽しかったです。
- *桜町教会では、社会活動委員会の活動が無かった様に思いました。今後の活動を楽しみにしています。
- *わかちあいによって、様々な意見を聴き、豊かになった。もう少しまとめの時間が欲しかった。何かが始まれば、新しい道ができると心強く感じた。
- *地域との関係を考える良い機会になった。
- *人と人との関わりを持つことで、社会と関わる教会となれると思う。いつも安全な関わり方を続けているは、なかなか実りがないと思う。人の思いに気づいて、待つ関係性を築いていくことが大切だと思う。
- *参加できてよかったです。今は、学んだことを生きている方々が、これだけおられることで、心強く感じています。
- *期待以上のお恵みをいただきました。特に酒井司教様のお話振りは、心に届きました。



(事務局の感想)

「つどい」の宣伝で四国のいくつかの教会を訪問する中で、私たちが四国の皆さんと、日程やテーマについて、全く相談せずに企画を進めていたことに気付かされました。それでも今回、参加して下さった多くの皆さんと顔を合わせて話をする中で、身近に感じる事ができたことを感謝します。

FAX やメールだけの関係から、お互いをもっと知り合い、必要な情報や助けを交換し合って、社会福音化の実を豊かにしていきたいと思いました。

皆さんのおかげで、集うことの大切さを改めて感じています。ありがとうございました。

福島で育つということ…

事務局 おおもりの ゆうじ 大森 雄二

はじめに、9月17日、「311子ども甲状腺がん裁判」の第15回口頭弁論で証言台に立った、いわき市出身の20代女性、ひとみさんの証言を全文紹介します。ぜひ、声に出して読んでください。



震災が起きた時、私は小学6年生でした。ランドセルを玄関に放り投げて学校に行き、ブランコに乗っていた時に大きな揺れがきました。

原発が爆発したことは、よく覚えていません。ただ、将来自分ががんになって、病院に行く想像をした一瞬は覚えています。いつかがんになって死ぬかもしれない。12歳で、そういうことを、なんとなく受け入れていました。

原発事故後の世の中の急な変化で、感情が麻痺し始めました。目の前が薄く暗くなり、沼の中を歩いているような苦痛な日々でした。でも毎日学校があって、部活に行き、友達と家に帰る。その繰り返しで、ニュースで語られる「フクシマ」と、自分の生活はかけ離れていました。外国では、福島に住人は住めないと言われているらしいけれど、私の目の前には震災すら日常になった日々がありました。

高校2年生のときに甲状腺がんが見つかって、手術することになりました。どうしてがんになったのか、先生に聞くと、「この大きさになるには10年以上かかるから、原発事故の前にできたもの」と説明されました。私は、「原発事故と関係ない」というその言葉を素直に受け入れました。

医師は私を見て「みんなあなたのようなよかったらいいのに」と言いました。その当時、「甲状腺がん」という言葉は原発事故と直結していて、この診断を聞いて、普通でいられる人はほぼいないのだと感じました。

検査も手術も、異様に軽い雰囲気が進められて、見つかってラッキーだったね。せっかくだし取ってしまおう。取ってしまえば大丈夫。そんなノリでした。

手術を終え、大学に進学すると、私は激しい精神症状に苦しめられるようになりました。幻聴、幻覚、錯乱状態、発作。身がちぎれそうな、激しい苦痛が9年続きました。その時はなぜ、そのような症状が出るのか、わかっていませんでした。でも、大学卒業後に受診した精神科で、震災のPTSDと言われました。

震災や原発事故があっても大丈夫だった。がんになっても大丈夫だった。

そう感情を麻痺させてきたツケを払うように、心も体も壊れていきました。

裁判のためにカルテを開示すると、1回目の検査の時は、がんどころか、結節もありませんでした。わずか2年で、1センチのがんができたのです。しかも、リンパ節転移や静脈侵襲がありました。

「事故前からあった」という医師の発言は嘘でした。この事実を知り、私の精神状態は悪化し、提訴後、会社を辞めました。

私は9年前、手術の前日の夜、暗い部屋で1人、途方もない不安や恐怖を抱えていました。その時、私の頭に浮かんだのは、「武器になる」という言葉でした。

私は当時、「甲状腺がんの子ども」を反原発運動で利用する人に怒っていました。私は、大人たちの都合のいい「かわいそうな子ども」にはならない。なにがあっても幸せでいよう。そう思いました。

不安と恐怖と混乱で溺れてしまいそうな中、手繰り寄せて掴んだものは、怒りです。尊厳を侵された時、怒りが湧くのだと知りました。

それをかすがいに、甲状腺がんへの不安を乗り越えた高校生の時の私と共に、今、私はここに立っています。

でも大人に利用されたくない、強く願っていた私は、気づくと、国や東電に都合のいい存在になっていました。胃がねじきれそうなほど、悔しいです。

私が受けてきたものは構造的暴力です。命より、国や企業の都合を優先する中で、私たちの存在はなかったことにされていると気づきました。

私たちは論争の材料でも、統計上の数字でもありません。甲状腺がんで、体と人生が傷ついた私たちは、社会から透明にされたまま、日々を生きています。

私にとって福島で育つということは、国や社会は守ってくれないということを感じることでした。十分すぎるほど諦め、失望しました。でも、私は、抵抗しようと思います。

命と人権を守る立場に立った、どうか独立した、正当な判決をお願いします。



子どもの甲状腺がんは、100万人に対して年間1~2人といわれる稀少ながんです。東京電力福島第一原子力発電所の事故後の14年間で、甲状腺がんと診断された子どもたちは300人を越えています。

被告の東京電力は、がん患者の増加は認めても、それが事故によって放出された放射性物質を体に取り込んだためとは言えないとして争っています。

チェルノブイリ原発事故後に原発の周辺国で多発した子どもの甲状腺がんについては、10年後に原発事故の影響と認められ、IAEA(国際原子力機関)も認めています。

福島では原発事故後から、政府が十分な調査を行わなかったため、「子どもたちが実際のどの程度被爆したのかわからない」状況が裁判を難しくしています。

原発事故後から国と東京電力が進めてきた、「放射能は、皆が思うほど危険で怖いものではない」という安全キャンペーンによって、この裁判は提訴まで11年かかりました。「気にしすぎ」「怖がりすぎ」の声によって、住民の分断が進み、不安から目を背け、心を麻痺させて暮らさざるを得ない現実がありました。

現在の原告は7名です。1人の原告女性は話します。「今も、他の私よりも若い子どもたちが、声を上げられない状況があります。今回、私たちが声を上げることで、他の苦しい人たちが声を上げられる状況になってほしい」。弁護団は、原告が数百人になってもおかしくないと考えています。



最後に、『世界史との対話』(小川幸司^{おがわこうじ}著、地歴社)から小川さんの言葉を紹介します。

「私たちは“豊かな生活”をおくっているうちに、“未来のいのち”がすっかり見えなくなっているのです。原発というのは、その極限の産物です」

「“未来の子どもたちのいのち”のために、自分の“大切なもの”を投げ出す世界観と勇気を持てるかどうかということです。そのためには、私たちが“子どものまなざし”で、この世界のごまかしを見破らなくてはなりません」

*パソコンやスマホで「子ども甲状腺がん裁判」と検索してください。
裁判や支援についての情報が出てきます。

集団懲罰 —— 海辺に閉じ込められたガザ市民

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき 西口 信幸

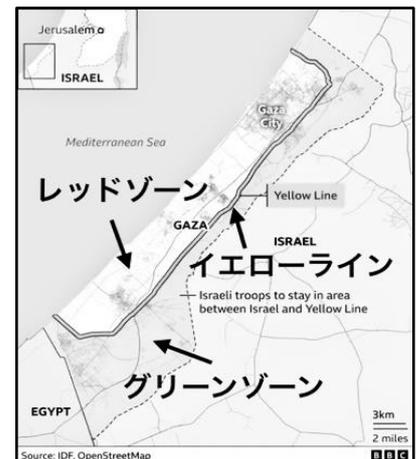
わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。
しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなる。
忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。
ルカ福音書 21:17-19

先月お伝えしたとおり、イスラエルのジェノサイドは問われることもなく「トランプの和平」がもたらすのはアメリカによる新たな民族浄化です。このひと月、地図上に勝手に線引きされた「イエローライン」はガザを半分に分断して、ハマスのいる地獄「レッドゾーン」と、アメリカが守る平和の地「グリーンライン」に変えようとする動きが始まりました。見捨てられた瓦礫の地で神さまから託された土地を守り続けるか、土地を捨てて「命だけの生」に生きるかの選択を迫られることになります。

報道が途絶えた中で、イスラエルの妨害と支援の停滞によって、少しずつガザは衰退しています。イエローラインによって区切られた中で起きている物語、厳しい生活に耐え、民族浄化への抵抗に共に生きるガザの人たちの、ニュースにならない忍耐の日々の一端をお伝えします。

グリーンゾーン —— 国連が承認した「トランプ20項目」（ガザの植民地化）

ガザの自決権を無視した植民地化を目指す「トランプ20項目」が、国連の安保理で決議され、国際安定化部隊の結成と統治機関となる「平和評議会」の設置も決まりました。この決議はガザの解放、平和ではなく、国連がお墨付きを与えたアメリカの植民地支配です。イスラエル占領を国際化し、傀儡の行政機関「パレスチナ行政」がガザ市民を集団懲罰としてレッドゾーンに押し込み、管理します。暴力の根本原因、イスラエルの違法な包囲、占領、民族浄化を終わらせるための何の措置も講じない決議案に、どの国も逆らわず、黙ったままです。国連もアメリカをトップとする残酷な弱肉強食の世界であることを浮き彫りにしました。



イエローライン —— イスラエルの停戦合意違反で殺害されるガザ市民

停戦後も毎日、イスラエルはイエローラインにまつわる口実のもと、497回違反し、少なくとも342人のパレスチナ人を殺害し、870人以上を負傷させました。またイエローラインを区切る黄色いコンクリートブロックを約300メートル内側に移動させ、支配地域を拡大させています。家族たちは翌朝目を覚ますと、イスラエル軍の砲撃で初めて、ラインの間違った側にいることに気づきます。



レッドゾーン——静かなジェノサイド

⚡ 復興、生活再建の意図的な妨害、救援物資の偏り

テントの深刻な不足、保健サービスの崩壊、食料と医薬品の極度の不足など、復興と再建をさせない、意図的で、停戦前よりも厳しい制限を物資搬入に課しています。病院やインフラへの攻撃により、ガザの病院は崩壊寸前です。基本的な医療物資のガーズ、抗生物質、必須機器の「深刻な不足」の中、医療支援が妨害されています。肉や家禽は腐敗してから入域させることで、多くの鶏肉が廃棄されます。それも市場用で法外な高値で、人々には買うお金が残っていません。

⚡ 瓦礫の下に1万人の家族が眠るガザ

残骸で満たされた街は腐臭の中、重機もなく手で掘り起こす毎日、遺体はすでに白骨化しています。

⚡ ゴミで溢れかえる通り

ゴミの山は 耐え難く臭い、息苦しい光景、むせ返っています。廃棄物の山は安全基準の1,000倍の有毒ガスを放出し、呼吸、心臓疾患、がんの脅威に。もっと恐ろしいのはゴミの中に砲弾の残骸が散乱していること…戦争の残り火が人々の命を脅かし、特に子どもたちを危険にさらしています。



⚡ 雨季、寒い冬を迎え、今年も凍死の危機か？

11月14日、ガザ市で激しい雨でテントが浸水し、テントを飲み込み、破壊され、住む場所を失いました。小さな子供たちがびしょ濡れになり、腕に赤ん坊を抱いたパレスチナ人少女が雨の中で泣いています。冬の寒さと雨から身を守るために、緊急で防水シートとテントが必要です。

⚡ 仮設住宅「キャラバン」は冬を生き延びるための唯一の解決策

しかし、何千ものキャラバンがエジプト国境で拒否されています——テントでは冬に私たちを守ることはできません。何ヶ月も太陽の下で、冬が始まる前に崩れ始めています。テントやシートもすべて、法外な値段で売られており、緊急救援が必要です--- 子どもの凍死を防ぐために！



⚡ 廃墟に吊り下げられた愛のパン袋

ガザの人々の苦しみの象徴が小麦粉です。「死の罨」の屈辱は決して忘れられません。停戦後、パンを一袋買うたび、戻った日常の喜びを深く噛みしめています。今、最大の喜びは、住まいの入り口に吊るされたパン袋です。余ったパンを置いていき、通りすがりの誰でも静かに取れるようにしています。一人の人がある袋を吊るし、他の人々がそれに続いたのです。飢えに苦しめられ、群衆をかき分け小麦粉一袋を求めた人々が、今では見知らぬ人々にパンを分け与えています。吊るされたパン袋の前を通り過ぎるたび、静かな満足感、温かさをもたらしてくれます。占領が壊そうとした人間性、互いへの思いやり、今すべて戻ってきました。私たちは互いを支え合うかを思い出したのです。



⚡ 「ガザでは、喜びさえも涙で濡れてやってくる」

イスラエルに殺害されたジャーナリスト、フッサム・マスリの娘である学生シャサ・マスリは、92.3という成績を収め、高校の全試験に合格した。父の夢を実現した彼女は自分の成功を、父の魂と、いっしょに歩み続けた忍耐強い母に捧げた。



キリストの再臨と生誕を待つこの時、私たちキリスト者が、聖なる場所で罪のないガザの民を罪に定め、凍死する子どもたちを瓦礫の海辺に放置しています。

祈りと断食と回心のうちに、前教皇フランシスコの導きを願って 

のとボランティア報告(11/11-14)

事務局 おおもり ゆうじ 大森 雄二

難民さん4名、事務所にボランティアに来ている女性1名と私で行ってきました。

今回は輪島ベースで3泊させてもらい、活動も輪島に集中しました。初日はブロック塀の解体。まさに現場でした、一日中。一転して、2日目は、山奥で一人暮らしする合田さん(80代前半)を訪問してのおしゃべりボランティア。今回はイラン人難民さんが母国料理3品を手作り。男性が占拠した台所に香辛料の香りが立ち込めて、合田さんにとっても異文化体験。とっても美味しいと喜んでくれました。3日目は、同じく一人暮らしの中谷さん(70代後半)の山でお手伝い。小さな畑や果樹に通じる小道をきれいにして、木の高いところに出来たゆずの収穫を手伝いました。ボランティアの依頼は初めての中谷さんにとって、私たちとの出会いが、何かのきっかけになればうれしいです。

今号では、これまで現地でお世話になってきた「カリタスのと」の二人のスタッフに原稿をお願いしました。

輪島ベース担当 もりた あつこ 森田 亜都子

去る10月7日、カリタスのとサポートセンターの新たな活動拠点、輪島ベースが開所しました。輪島ベースは、再建された輪島教会の2階をボランティア宿泊スペースとしてお借りし、最大で男性3名と女性3名、または同性6名まで、ご利用頂くことが可能です。現在の輪島ベースでの活動は、支援物資個別お届けと見守り訪問、市営団地や仮設集会所でのカフェに加えて、他団体と共に泥出しや家屋片づけなどの活動に参加しています。また、輪島市民で新たに起ち上げた「輪島支援協働センター」による災害復興ボランティアセンターの運営にも携わっています。輪島に活動拠点があるおかげで、これら様々な活動に9時から16時までじっくりと取り組むことが可能になりました。ボランティアの皆さまは輪島ベースまでお越し頂くのが大変ではありますが、ベースに滞在いただくことで現在の輪島をより一層感じていただけるのではないかと思います。



左:合田さん 右:森田さん

私自身、輪島ベースに宿直するようになって初めて実感したことがあります。ベース最寄りのコンビニは夕方6時で閉店、それは買い物にくる人が居ないということです。明かりの灯った家が本当に少なく、街灯もないため夜の闇がとても深くて不安で心細くなります。輪島の皆さんはこのような夜を過ごしているのか…。



災害からの復旧復興に時間がかかるほど、人々は再起を諦めこの地を離れていってしまうのでしょう。

私たちボランティアは本格的な修理や修復工事はできませんが、少し家が片付いて綺麗になった、側溝の水が流れるようになった、話をして気持ちが楽になったなど、一時的な時間稼ぎだとしても、明るい前向きな気持ちになっていただく活動はできます。

能登のまちの明かりが消えてしまわないように、長く地道な支援活動が必要とされています。輪島ベースに集まったボランティアの皆さんと共に、この活動を続けていけることを心から願っています。

ゆずを収穫する難民さん



右が濱野さん

七尾の現状は刻一刻と変化しています。発災当時は七尾市内でも断水が続き、炊き出しや社協での災害ボランティアなどを行っていました。そのうち社協での災害ボランティアセンターも閉鎖し、その後は民間の災害ボランティアセンター「おらっちゃ七尾」での活動に参加するようになりました。その中では公費解体に伴う家財の運び出しや、仮設やみなし仮設への引っ越しなどの作業を多く行ってきました。現在も変わらず行っていますが、七尾市の公費解体が年内終了の見込みとなり、作業系のボランティアは「最後の追い込み」の時期になっています。今後はサロンなどのソフト系のボランティアへ移行していきます。

その中で、カリタスのとサポートセンターでも「おらっちゃ七尾」への参加や、ベースのある聖母幼稚園前での「じんのびカフェ」などの活動を続けています。毎日のように参加者が変わるボランティアベースにおいて、「シナピス」のように継続して参加して下さっている皆様のおかげで私たちスタッフはとても助かっています。

発災から2年近く経とうとしていますが、現在でも解体前の壊れた家屋に住んでおられる方々が多く居られます。仮設住宅へは入居することが出来たものの、その後住む場所が見当たらず嘆いておられる方も多く居られます。その様な中で「のとのとなり」をスローガンとして、共に寄り添いながら活動を続けていくためにはまだまだ、多くの方々のご支援が必要です。多くの方の支援の手が必要です。

教皇フランシスコが始めた共に歩む「シノドス」の道は、教会の中で、また特に被災地である能登で特別な意味を持ってきます。シナピスをはじめ様々な状況の方々と一緒に、能登に住む被災者の方々の所に出向き、耳を傾け、寄り添う事はまさに生きた教会そのものです。私たちの歩みは小さいですが、私たちと被災者の方々を必ず照らしてください。それこそが神様の働きですから。



森田さんは、私たちボランティアが活動を全うできるよういつも配慮して、作業スケジュールを組んでくれます。私たちの作業能力とチームワーク(そして多分、被災者に寄り添う姿も)を評価してくれていて、最近「やり始めたことはやり遂げるのがシナピスですね」との言葉をいただきました。東日本大震災での被災地ボランティアの経験から「カリタスのと」への参加を決意された、現場から離れられない人のようです。

濱野さんは東京教区の20代半ばの青年。すでにサンチャゴの巡礼路を歩いています。いつも懐深く受け容れてくれる彼のことが、難民さんたちは大好きです。彼と一緒に作業で汗を流し、夜は思いつき語って笑う。その時間こそが、難民さんたちにとっての救いのひと時と感じます。私は、活動終了後のわかちあいでの彼の言葉が好きです。神を求めて哲学する青年のようで。

3日目に会った中谷さんが収穫したゆずを農協に持って行くということで、その場で買い取ってきました。復興のための大型ダンプが行き交う道に、高齢ドライバーの車が混ざっているのが輪島の現実です。このゆずで今、事務局では山田さんと私がジャム作りに励んでいます。苦みや酸味が強くて悪戦苦闘中。

どなたか、ご指南ください！

「ジャム作りで輪島とつながろう」とたくらんでいます！！



左:大森 右:中谷さん



「真面目に 従順、に働くところなる」

フリーライター おおもと あさみ
大元 麻美

人権問題に取り組んでいる市民団体は、社会・政治状況の改善を求めてしばしば関係省庁と話し合う機会を持ちます。そうした「省庁交渉」を取材する度に、驚くことがあります。誰かのいのちを守るために、必死に活動している市民グループの熱量とは対照的に、「省庁交渉」に出てくる担当職員たちはあきれほど不誠実で、機械的対応、をします。

千葉県で今年5月に開催された「武器見本市」に、パレスチナ・ガザを攻撃し多くの人々を虐殺したイスラエルの軍事企業が出展しました。市民団体が10月29日、省庁交渉をした時のやり取りがこんな具合です。市民団体が「イスラエルの軍事企業と政府機関が出展することを把握した上で、『武器見本市』の後援をしたのですか？」と問うと、防衛省職員は「後援するにあたっては規則に即しています」と返答。市民団体が重ねて「イスラエルの軍事企業が出展することについて把握していたのですか？」と質問すると、防衛省職員は「後援するにあたっては規則に即しています」と全く同じ答え。業を煮やした市民団体が「私たちの質問は簡単です。イエスかノーで答えてください」と語気を強めても、防衛省職員は同じ文言を繰り返したのです。

また別の市民団体が山口県宇部市の「長生炭鉱遺骨収容」問題で10月21日に省庁交渉を行った時も同様でした。長生炭鉱は海底炭鉱で第2次世界大戦下、水没事故を起こし、183人の犠牲者を出しました。そのうちの136人が当時日本の植民地だった朝鮮半島から連れて来られた人々です。

市民の力で今年8月、83年の時を経て遺骨が発見されたので、市民団体は省庁交渉で警察庁担当者に、発見された遺骨についてのDNA鑑定を求めたわけです。以下がこの時のやり取りです。

市民団体「遺骨を収集してから2カ月もたっているのになぜDNA鑑定が進まないのですか？」

警察庁職員「韓国と日本でDNA鑑定法が同じかどうか確かめる必要があるからです」

市民団体「前回も同じことを言っていました、あれから1カ月もかかって、まだ韓国のDNA鑑定法を確認できていないのですか？」

警察長職員「今、確認しているところです」

市民団体「私たちが韓国に問い合わせてもう確認しましたよ。日本と同じ鑑定法です。だからDNA鑑定を進めてください」

警察庁職員は、「韓国のDNA鑑定法を確認する必要があります」と繰り返すばかりでした。

取材で出会った「ジェノサイドに抗する防衛大学卒業生の会」のメンバーの言葉を思い出します。防衛大卒業生も、防衛省の職員の中でも、武器の輸出入に反対している人は多いと言うのです。それなら、なぜ防衛省が「武器見本市」の後援をするのでしょうか？と問うと、彼はこう答えました。「真面目に仕事をするとこうなるのです」。つまり上司の命令に忠実に従い、真面目に、働くと、自分の考えは胸の中にしまい込まざるを得ないのだということです。

「長生炭鉱の遺骨収容」に取り組む市民団体「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の井上洋子共同代表が、関係省庁担当職員に涙ながらに訴えた言葉が忘れられません。「私たちは、関係省庁の皆さんに現場に来てほしいのです。現場には悲しみがあります。その悲しみを共有してほしいのです」。

今年1年を振り返ってみれば、カトリック教会の中で「省庁交渉」と同じようなやり取りを、何度も経験させられました。上司の命令に従い「真面目に」働く人々。そうした人々に、いくら現場の「悲しみ」を訴えても、その「悲しみ」は「他人事」でした。キリスト者は、一体誰に対して、何に対して忠実で「真面目に」働くのか？ 自分自身も含めて皆でもう一度、「キリストの教え」を胸に刻みたい。



投稿欄 ガリラヤの風

仁川教会 土器屋 香代子

子どもたちからさりげなく「断捨離」を促される年代となり、パソコンが普及する前から保管してきたプリントを整理することがあります。その折に、「大阪教区社会活動ニュース」(2001・11)を見つけました。

出版元は、大阪教区社会活動部門 カリタス大阪 国際協力委員会「正義と平和」協議会 平和の手と書かれており、「シナピス」に至るまでの歴史を見た思いがしました。

もう一部は、2003年3月号で、その“ニュースレター”の名前は「シナピス」で、お知らせ「シナピス」(大阪教区社会活動ニュース)は、今回が最終号ですと書かれています。

ページをめくると、「きずな」というコラムに、なんと「まだ高齢者にはなっていない私」の原稿が…。

すっかり忘れていたのですが、ファイルに入れて保管していた理由が分かったような気がしました。

歳月の流れを感じる、その原稿を紹介させていただきます。

高齢者の心の寂しさを癒せるように

ある老人ホームに、ボランティアとして音楽療法の手伝いと昼食時の介護に行っていた時のこと。

広いホールで昼食をしているお年寄りの中に、首が後ろに倒れたままで車椅子に乗っている重症の男性がいた。その方の介護をしていた職員が席をはずし、口を開け頭が後ろに倒れたままの格好がとても苦しそうに見えたので、私は思わず走って行き、彼の口に食事を運びながら語りかけた。そして、私の素手で彼の口やひげについた汚れをふいた時、彼の頬に涙が流れた。

やがて食事の時間が終わり、その方の車椅子を押してエレベーターに乗る順番を待っていた時、彼が一人で洗面台にさっさと歩いて行き、口をすすいだのである。私はもちろんのこと、職員も「奇跡だ！」と口々に叫んだ。その時の私は、一週間に一度のボランティアなので、心穏やかに優しくお年寄りに接することができた。つまり、つきっきりで介護をしなければならない方とは違い、その場だけの“工工恰好”ができたのだと思う。

しかし、職員すら驚いたこの“奇跡”の体験によって、お年寄りの心の寂しさを癒すことができるのは、贅沢な設備や物ではなく、人の心しかない実感した。

私を含め団塊の世代が“老人”になる日はもう目の前。重い認知症でコントロールできなくなることを考えると愕然とするが、ホイヴェルス師の『最上のわざ』の詩を心に刻み、「人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱って、もはや人のために役に立たずとも、柔和であること。…老いの重荷は神の賜物、古びた心に、これで最後のみがきをかける。まことのふるさとへ行くために」と理想を描いている。でもその前に、あの“奇跡”体験を糧にして、身の周りの淋しい方たちの心の癒しに少しでも役立ちたいと願っている。痴呆の症状が進んできた超元気な義母との闘いも、できるだけ明るいタッチのドラマに仕上げたいと願っている今日この頃である。

その一面の大みだしは「難民が暮らしやすい社会はみんな暮らしやすい」。最後のページには、「シナピス学習会」報告や「私と社会活動」というコラムがあり、ずっとずっと「シナピス」の思いと活動が続いてきていることを感じました。

つぶやき アラカルト

玉造教会 ^{まつもと こうじ} 松本 晃二

八尾市の国際交流のイベントに行きました。韓国・朝鮮・中国・ベトナムフィリピン・ペルーの小学生から中学生の子どもたちがそれぞれの民族の楽器で民族の歌などを奏でて披露していました。とても可愛いらしく見て楽しかったです。人もいっぱい来てました。あらためて八尾市に外国人の方が多く住んでるんだなあと感じました。

学校でも様々な民族の文化を教えて勉強しています。各学校の民族クラブの子どもたちが昨日今日とみんなの前で演奏などを発表し見てもらい交流する場ですね。インターナショナルデーのアジアの子ども版ですね。国際友愛・国際平和は大切ですね。自分の代父さんがベトナムの方なのでベトナムチームの時は鼻真目に見ていました(笑)



教会では共同体共同体とよくいいますが、共同体を感じたことがありません。西成には共同体があります。西成は互助会的な町です。助け合いの精神がなければ西成では暮らしていけません。自分は西成に長いこといましたが、住む所がない時住む所を提供してもらい、毎日の食事をお世話してもらった時があります。知り合いからです。こちらも経済的な事以外では、そのお世話してくれていた人を助けたりしていました。お互いのない部分を助け合うと言う感じです。西成での助け合いというのを一般の方は想像もつかないと思います。でも西成にも共同体がありました。この目で見、自分自身も経験しています。なので、共同体という教えの教会に共同体がないことに異議を唱えたくくなります。



10月号ニュースの「忘れない あきらめないカレンダー」を見て

事務局 ^{おおもり ゆうじ} 大森 雄二

毎号のニュースに、講演会や学習会、お祭りやデモ、映画の情報などを満載した「忘れない あきらめないカレンダー」を挟み込んでいます。お気づきでしょうか？

10月のカレンダーに「神戸電鉄敷設工事 朝鮮人犠牲者を追悼する集い」(19日)を掲載しました。

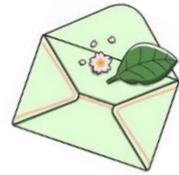
すると先日、カレンダーを見て、この集いに参加された方がおられたことを、主催者から知らされました。多くの情報を集めてカレンダーにするのは、なかなか手間のかかる作業です。一つ報われたような気持ちになりました。お名前がわかったので、連絡させていただきました。「家のそばだとわかったので、散歩がてら出かけました」とのお話。カレンダーを通して実際に足を運んでくださった方の声を聴けて、これからもがんばろうという気持ちになりました。

天気が良くて外に出てみようと思う時、ぜひ、このカレンダーを思い出してください。教会の外では、粘り強く活動を続ける市民グループがたくさんあります。特に当事者の声や、調査や研究をずっと続けてきた方たちのお話は、新聞やニュースだけではわからない、たくさんのことを教えてくれます。

私は一度、プロテスタントのグループが主催した原発の集会でバールを被った3人のシスターとお会いしたことがあります。その中のお1人は90歳前後の方でした。学び続けるお姿に感銘を受けました。



シナピスホーム便り



事務局 やまだ 山田 なおこ 直保子

シナピスで毎週木曜日に働いてくださっているベトナム人のシスター、マリア・ランが、月に一回ホームにも来てくださっているのですが、11月のランチでは彼女がベトナム料理を振る舞ってくれることになりました。

15日のランチ当日、マリア・ランさんは2人のベトナム人信徒と共に、ホームの住人の中国人夫婦も手伝ってくれて、朝早くから調理してくれました。ほかのホームの難民移住者は11日から能登へボランティアに行っていて、前日の夜中に帰ってきたので、疲れもあり、すぐに身体が動かなかったのが大変助かりました。

釜ヶ崎やいろんな場所で大量の食事を作り慣れているベトナム人2人もテキパキと調理し、時間が余るくらい余裕のある段取りで、余った時間は写真を撮ったり、中国人夫婦と翻訳アプリを使って交流したりと、楽しめたみたいです。

メニューは、「揚げ春巻き」「鶏肉とカシューナッツの炒め物」「エリンギのスープ」でした。カシューナッツですが、日本で、おつまみで売っているカリカリのものしか知らない私でしたが、マリア・ランさんに写真を見せてもらい、ピーマンのような形の野菜にぶら下がっているのが柔らかい生のカシューナッツだと教えていただき、見るのも食べるのも初めてでした。



生のカシューナッツ

お客様に写真を見せたら、私と同じくカシューナッツってこんな風に見えるんだと目を丸くされていました。

食べてみたら柔らかくモチモチしていて、コクがあり、とても美味しくてビックリしました。

揚げ春巻きは、ホームにいるイスラム教の人たちに配慮して、鶏肉を使ってくださり、カラッと揚げて、「そのまま食べてもいいし、特製のピリ辛ダレをつけたり、レタスを巻いて食べても美味しいです」とマリア・ランから説明があり、それぞれ楽しみながらいただきました。

今回のランチも皆さん大変喜んでくださり、「ここに来たら、いろんな国の料理が食べれるのは嬉しいですね」とおっしゃってくださいました。

そんなシナピスホームは、12月2日で丸5年を迎えます。12月6日には5周年として、ちょっぴり豪華なランチをご用意しようと計画しています。

みなさま、ぜひ遊びに来てくださいね。ご予約のお電話(☎080-8940-8847)お待ちしております。



左:ベトナム料理調理中
エプロン姿は Sr.マリア・ラン

右:「本日のメニュー」
揚げ春巻き
鶏肉とカシューナッツの
炒め物、エリンギのスープ



事務局こぼれ話

あつこ
ビスカルド篤子

11月00日 そんなこと、ある??

アビさん(仮名)の夫は心臓病で入院中、のはずでした。ある日、アビさん宛てに封書が届き、開けてみたら「故・鈴木さんの借金返済を」とあるではありませんか。仰天して役所へ行くと「10月17日に死亡」が判明、彼女はシナピスへ転がり込んできました。

アビさんによると、夫への見舞いは今年の7月が最後だったそうです。その後、面会に行くと「キーパーソン」が妻から従妹に変更されたから、従妹の承諾がなければ会えない」と病院に言われたというのです。「私、奥さん、承諾してない」と言っても「従妹を通して」の一点ばりで、当の従妹は着信拒否で連絡が取れずに時が流れたそうです。

私たちは病院に問い合わせしてみました。病院には「なぜ危篤の時に妻に知らせなかったのか」「夫の最期の様子はどんなだったか」の2点だけを尋ねましたが、電話では要領を得ません。そこで私たちは予約を取って病院へ事実確認に行くことにしました。

病院では主治医と看護師が対応し、カルテを見せながら丁寧に説明してくれました。キーパーソンを妻から従妹に変更した件については、まだ患者に意識のあった春頃に、患者本人が意思表示をしていたことがわかりました。医療現場で多忙を極める病院では、家族を含む外部との連絡役はキーパーソンに絞るのが鉄則だそうです。10月16日、アビさんの夫の容態が急変したときには、看護師たちは従妹に「妻へ連絡を」と何度も伝えたそうです。カルテにはその記録もちゃんと残っていました。

キーパーソンとなっていた従妹は、夫の実印や通帳などを持ち出しており、アビさんには夫の死も告げず、行方をくらましています。「怒るのは病院に、じゃなくて、従妹だ」とアビさん。何ごとも現場に行かないとわからない、と痛感した一件でした。



子のない家族の尊厳を踏みにじる

ほとんど同時期に日本人と結婚し、新たな生活を続けながら在留許可を待つBさんとPさんとAさん。今年、立て続けにPさんとAさんに在留許可が下り、彼らはやっと仕事ができるようになり、健康保険も付与され、当たり前の市民生活を手にしました。そんななかBさんだけは帰国を迫られました。なぜか。Bさんにはこどもがないからです。

子宝に恵まれないBさん夫妻に入管職員は面と向かって「あなたたちにはこどもがないから許可出さない」と言って帰国を迫ります。妻は屈辱的な思いで唇をかみながら、夫が強制送還されてしまう恐怖を前に、押し黙るしかありません。

強大な権力を使って「子がなければ家族と認めない」と夫婦を引き離そうとする国家とは何なのでしょうか。家族は家族です。子がいるいないは関係ない。家族は、家族です。

公式ラインとフェイスブックが
新しくなりました



公式ラインはこちらから

<https://lin.ee/hlNnRd6>



FaceBookはこちらから

<https://www.facebook.com/profile.php?id=61577353826677>



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

シナピスホーム5周年記念



シナピスホーム (カフェ)
12月の予定

ランチ: 6日

★土曜日の11時頃~16時頃

★ランチは要予約

☎ 080-8940-8847

カフェ: 13、20日

★土曜日の13時頃~16時頃

—シナピス休業と始業のお知らせ—

休業: 12月25日(木)~1月4日(日)

始業: 1月5日(月)

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

難民さんの背骨の曲がり具合が気になって、整体に詳しい人に相談したら、なぜかその人がさっと私の背中を触って、「背中の筋肉、背骨みたいになががちです。猫背もひどくて難民さんよりよっぽど心配」と返されました。猫背も体が硬いことも家族に言われ続けてきたことですが、会うのが数回目の人に指摘されると、格別に心に響くものです。すぐにストレッチポールを購入し、乗ってごろごろしています。

同じことを言われて、聞き流すのと、行動にまで移す時の違いはなんだろうと考えています。今回の私は、わかっていながら放ってきたことを、付き合いの浅い人にズバっと指摘されて恥ずかしかったから動きました。

ニュースが届ける声にはどうでしょう？

来年は、「応答する=行動に移す」を個人的なテーマにしようと思った年の瀬です。(ゆ)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約800m

JR 玉造駅より 約1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法門坂出口

法門坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

